CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

『新葉和歌集』の哀傷歌―哀悼の小宇宙―

伊藤伸江

一

弘和元年（南朝年号・一三八一）に成立した『新葉和歌集』は、後醍醐、後村上、長慶の三代の天皇の御代に仕えた南朝の人々の和歌を集め、長慶天皇より准勅撰の綸旨を得た集である。撰者宗良親王による仮名序には、「ならの葉の名におふみかどの御ときより正中のかしこかりしおほん世にいたるまで、えらびあつめらるる跡十あまり七たびになんなれりける」(注1)と、『万葉集』から後醍醐天皇の命による『続後拾遺和歌集』に至るまでの、十七度の撰集を視野におさめた和歌史の認識が語られており、『新葉和歌集』は『続後拾遺和歌集』の後を継いで編纂される集との位置づけがなされている。『新葉和歌集』成立以前に、『続後拾遺和歌集』以降、北朝方では『風雅和歌集』、『新千載和歌集』、『新拾遺和歌集』と三度の勅撰集が編纂されたが、南朝方の人々の詠は、原則として入れられなかった。宗良親王は、撰集にもれる憤りを「いかなれば身はしもならぬことの葉のうづもれてのみ聞えざるらん」（『新葉和歌集』・雑中・1203）と二条為定に書き送り、「くれ竹のその人数につらなりても三代の御門につかへ、和歌の浦の道にたづさひてはななそぢのしほにもみちぬる」と我が身をふりかえって、「かつは老の心をもなぐさめかつはすゑの世までものこさんために」（同・仮名序）『新葉和歌集』を編纂したのであった。

さて、この『新葉和歌集』は、その政治的な成立事情から、都を離れ諸国をめぐり戦う悲しみやつらさ、君を思う

忠誠心などを詠んだ和歌がとりわけ顕彰され鑑賞されてきた過去を持つ(注2)。その反動もあり、第二次世界大戦後には、読解や鑑賞があまりおこなわれてこなかった集であった(注3)。この論では、『新葉和歌集』全体の構成等を概観し、ついで哀傷巻の和歌を考察しその特性を考えたい。

二

『新葉和歌集』は全歌数一四二六首、うち哀傷歌は巻十九として独立しており、1323から1393までの七一首を占める。『新古今和歌集』の後、哀傷巻を独立させて哀傷歌をおさめる勅撰集は、『続古今和歌集』、『続千載和歌集』、『続後拾遺和歌集』、『新千載和歌集』、『新拾遺和歌集』があった。『新葉和歌集』及び『続古今和歌集』から『新葉和歌集』成立直後までに成立した勅撰集（成立順、『新後拾遺和歌集』は一三八四年成立）の部立は次のようである。

新葉　仮名序・春上下、夏、秋上下、冬、離別、羈旅、神祇、釈教、恋一～五、雑上中下、哀傷、賀
続古今　真名序・仮名序・春上下・夏・秋上下・冬・神祇・釈教・離別・羈旅・恋一～五・哀傷・雑上中下・賀
続拾遺　春上下・夏・秋上下・冬・雑春・雑秋・羇旅・賀・恋一～五・雑上中下・釈教・神祇
新後撰　春上下・夏・秋上下・冬・離別・羈旅・釈教・神祇・恋一～六・雑上中下・賀
玉葉　春上下・夏・秋上下・冬・賀・旅・恋一～五・雑一～五・釈教・神祇
続千載　春上下・夏・秋上下・冬・雑体・羈旅・神祇・釈教・恋一～五・雑上中下・哀傷・賀
続後拾遺　春上下・夏・秋上下・冬・物名・離別・羇旅・賀・恋一～四・雑上中下・哀傷・釈教・神祇
風雅　真名序・仮名序・春上中下・夏・秋上中下・冬・旅・恋一～五・雑上中下・釈教・神祇・賀
新千載　春上下・夏・秋上下・冬・離別・羇旅・釈教・神祇・恋一～五・雑上中下・哀傷・慶賀
新拾遺　春上下・夏・秋上下・冬・賀・離別・羇旅・哀傷・恋一～五・神祇・釈教・雑上中下
新後拾遺　仮名序・春上下・夏・秋上下・冬・雑春・雑秋・離別・羇旅・恋一～五・雑上下・釈教・神祇・慶賀

『新葉和歌集』と他の撰集との部立の構成の類似については、『続千載和歌集』に近いこと(注4)が指摘され、また

『続現葉和歌集』などの私撰集とも似ているのではないかとの意見(注5)が既に出されている。『続千載和歌集』については、後述するように贈答歌の組数も多く、この点からの類似も感じられるが、勅撰集の巻の独立のさせ方を見た時、四季、恋、雑以外に離別、羈旅、神祇、釈教、哀傷、賀がそろっているのは、『続古今和歌集』、『続後拾遺和歌集』、『新千載和歌集』(賀は慶賀と呼ばれる)、『新拾遺和歌集』である。神祇と釈教の順がいれかわってはいるものの、『新葉和歌集』は、この中では『新千載和歌集』に近いといってよい。『新千載和歌集』は、宗良親王の和歌の師でもありいとこでもある二条為定の撰であり、おそらく為定と大覚寺統とのつながりから、後醍醐天皇や後宇多院といった大覚寺統の人々の和歌も多く入れている(注6)。それゆえ、勅撰入集を切望し、『新千載和歌集』の撰直後に死亡した為定をいたみわざわざ哀傷五十首歌をつかわした宗長親王が、この集を見ていないはずはないであろう。撰者為定が初めて完全に撰をなした勅撰集であり(完成時宗良親王四八歳。『続後拾遺和歌集』も為定の撰になるが、撰者為藤死亡後に為定が完成したもので、完成時宗良親王は一五歳)、『新千載和歌集』も、北朝の撰集ではあるもの、宗良親王にとって無視しえない集であったであろう。

次に、『新葉和歌集』全体の歌数(一四二六首)に哀傷歌(七一首)が占める割合を見ると、約4・99%である。哀傷の巻を持つ勅撰集では『続古今和歌集』(総計一九一五首、哀傷歌九六首)が5・01%、『続千載和歌集』(同じく二一四三首、六七首)が3・1%、『続後拾遺和歌集』(一三五三首、四六首)3・4%、『新千載和歌集』(二三六五首、一〇九首)4・6%、『新拾遺和歌集』(一九二〇首、七六首)4・0%であり、早く『続古今和歌集』が最も高いパーセンテージを持ち、その後減少していたものが『新千載和歌集』で増加したといえようか。そして、新葉集の哀傷歌の割合は近傍の勅撰集と比較してより多いと言えよう。

さて、『新葉和歌集』哀傷巻を通覧した時にまず気がつくのは、その贈答歌の多さである。元来、この時代の勅撰集や、その撰歌資料の集成をめざした私家集は、応製百首や各種公的歌会、歌合の詠から撰歌するのが通例であり、贈答歌のような私的な関係性を持った歌が四季や恋の巻に多数入集することはない。ただ、雑、離別、羈旅、哀傷といっ

た巻では、題詠以外の詠が入りやすいし、特に哀傷巻では、ある故人を念頭に置き、悼みあう贈答歌が巻の主題そのものにかなうゆえ、この巻に贈答歌の組が多くなることは納得できる。だが、『新葉和歌集』哀傷巻総計七一首中、二首連続して配列されている贈答歌は13組二六首、割合にして36・6%に達し、三分の一以上が贈答歌の組で占められている状況はやはり特筆すべきものであるといえよう。『新葉和歌集』全体での贈答歌の組数を見ても、春上1、春下1（詞書に歌の入るもの1、注、贈答歌の組数以外に数えており、以下同様）、夏1、秋上1、秋下2、冬0、離別3（詞書に歌の入るもの2）、羇旅0、神祇0、釈教2（詞書に歌の入るもの1）、恋一0、恋二0、恋三0、恋四1、恋五0、雑上4、雑中0、雑下6、哀傷13（詞書に歌の入るもの2、独詠歌に添えた歌1）、賀1の計36組（同じく計6組）と、哀傷巻での贈答歌の組数が突出しているのである。

『新古今和歌集』の後、哀傷の巻のある各勅撰集について、集全体での贈答歌の組数分布を見ると、『続古今和歌集』では、春上0、春下0、夏0、秋上2、秋下1、冬2、神祇0、釈教0、離別3、羇旅0、恋一0、恋二1、恋三1、恋四0、恋五1、哀傷7、雑上2、雑中1、雑下5、賀2の計28組。『続千載和歌集』では、春上1・春下2・夏0・秋上2・秋下1・冬0・雑体0・羇旅7・神祇1・釈教5・恋一0・恋二0・恋三2・恋四1・恋五0・雑上6・雑中4・雑下3・哀傷6（詞書に歌の入るもの2）・賀3の計44組（同じく計2組）であった。『続後拾遺和歌集』では、春上0、春下0、夏0、秋上1、秋下0、冬0、物名0、離別1、羇旅0、賀0、恋一0、恋二1、恋三3、恋四0、雑上1（詞書に歌の入るもの1）、雑中3、雑下1、哀傷3、釈教0、神祇0の計14組（同じく計1組）であり、『新千載和歌集』では、春上1（詞書に歌の入るもの1）、春下3（詞書に歌の入るもの1）、夏0、秋上0、秋下2、冬1、離別1、羇旅0、釈教5、神祇0、恋一2、恋二2（詞書に歌の入るもの1）、恋三2、恋四4（詞書に歌の入るもの2）、恋五0、雑上7（詞書に歌の入るもの2）、雑中6（詞書に歌の入るもの1）、雑下5（詞書に歌の入るもの2）、哀傷16、慶賀3の計60組（同じく計10組）であった。また、『新拾遺和歌集』では、春上0、春下4、夏1、秋上0、秋下0、冬1、賀3、離別0（詞書に歌の入るもの2）、羇旅1、哀傷11、恋一0、恋二0、恋三1、恋四1

（詞書に歌の入るもの2）、恋五0、神祇0、釈教1、雑上1、雑中3、雑下0の計28組（同じく計4組）であった。なお『新後拾遺和歌集』は、春上0、春下0（詞書に歌の入るもの1）、夏0、秋上0、秋下0、冬0、雑春0、雑秋0、離別0（詞書に歌の入るもの1）、羈旅0、恋一2、恋二0、恋三0（詞書に歌の入るもの1）、恋四1、恋五0、雑上0、雑下1（詞書に歌の入るもの2）、釈教0、神祇0、慶賀1（詞書に歌の入るもの1）の計5組（同じく計6組）である。総歌数の違いを念頭に入れても、贈答歌組数は、『続千載和歌集』『新千載和歌集』で雑、哀傷の巻などを中心に全般的に増加し、『新拾遺和歌集』の哀傷の巻にその増加の名残を残しながら、『新後拾遺和歌集』では既に減少したといえようか。

さらに勅撰集哀傷巻内の贈答歌の組数の割合を見ると、『続古今和歌集』が哀傷巻九六首中贈答歌7組一四首（14・6％）、『続千載和歌集』が哀傷巻六七首中贈答歌6組一二首（17・9％）、『続後拾遺和歌集』が哀傷巻四六首中贈答歌3組六首（13・0％）、『新千載和歌集』が哀傷巻一〇九首中贈答歌16組三二首（29・4％）、『新拾遺和歌集』が哀傷巻七六首中贈答歌11組（内3首の贈答が1組）二三首（30・3％）であり、『新千載和歌集』、『新拾遺和歌集』に多くなっているが、こうした集と比較しても『新葉和歌集』の割合が最も多いのである（注7）。以上のように、部立構成、哀傷の巻の歌数、贈答歌の組数などを通覧すると、『新葉和歌集』は成立年代の近い勅撰集である『新千載和歌集』、『新拾遺和歌集』と似た傾向を示している集であるといえるが、哀傷巻における贈答歌の組数においてとりわけ多いという特徴があるのである。

三

哀傷歌の巻の各歌の性格を見る。以下に、作者、追悼対象者、詠作年時、題、巻内の他の歌との贈答関係等を示してみた（作者・追悼対象者（故人を直接追悼した和歌と明らかでない場合は記さない）・詞書からわかる範囲の詠作年時もしくは推定詠作年時・題・巻内の他の歌との贈答関係・当該歌のその他特徴の順にわかるものを記す）。

1323　文貞公（花山院師賢）・「旧遊零落半帰泉」

1324　宗良親王・後醍醐天皇・「後醍醐天皇かくれさせ給ひし比」（後醍醐帝は延元四年（一三三九）八月一六日崩御）

1325～1327　宗良親王・二条為定・「前大納言為定身まかり侍りし比」（為定は正平一五年（一三六〇）三月一四日死）

1328　後醍醐天皇大納言典侍（洞院公敏女）・後村上天皇・正平二四年（一三六九）春（後村上天皇は正平二三年（一三六八）三月一一日崩御）

1329　新宣陽門院・後村上天皇・後村上帝崩御翌春以降か・「春月」

1330　宗良親王・宗良親王子と後村上天皇の両説あり（注8）・天授二年（一三七六）春

1331　宗良親王・法印俊慶（為定弟）・「法印俊慶身まかりにける比」（貞和二年（一三四六）以前）・二条為定への答歌（詞書に二条為定の贈歌）

1332　新待賢門院・後醍醐天皇・延元五年（一三四〇、四月に興国元年に改元）春

1333　新待賢門院・後醍醐天皇・正平四年（一三四九）三月十日（『李花集』）・1334と贈答

1334　宗良親王・後醍醐天皇・正平四年（一三四九）三月十日（『李花集』）・1333と贈答

1335　粟田久盛朝臣・後醍醐天皇・延元四年（一三三九）後醍醐帝崩御以降

1336　右近大将長親母・「寄花無常」

1337　二品法親王仁誉・「寄花無常」

1338　後醍醐天皇・「芳野の行宮にて」（延元元年（一三三六）以降）

1339　宗良親王・後村上天皇・天授二年（一三七六）三月一一日（1341の表現より後村上帝九回忌の詠）・1340と贈答

1340　前大僧正頼意・後村上天皇・天授二年（一三七六）三月一一日・1339と贈答

1341　長慶天皇・後村上天皇・天授二年（一三七六）三月一二日・1339、1340を聞いての詠
1342　新待賢門院・後醍醐天皇・延元四年（一三三九）八月一六日以後その年のうちか
1343　新待賢門院・後醍醐天皇・興国元年（一三四〇）夏
1344　妙光寺内大臣母（家定公女）・金光院家定入道右大臣・「金光院家定入道右大臣身まかりにける比」（家定は興国三年（一三四二）四月二十八日死）
1345　新宣陽門院・後村上天皇・正平二三年（一三六八）五月五日・1346と贈答
1346　嘉喜門院・後村上天皇・正平二三年（一三六八）五月五日・1345と贈答
1347　後村上天皇・新待賢門院・正平一六年（一三六一）五月五日・1348と贈答
1348　前大納言実為・新待賢門院・正平一六年（一三六一）五月五日・1347と贈答
1349　右近大将長親・妙光寺内大臣及び後村上天皇・正平二三年（一三六八）三月十一日以降まもなく
1350　遍照光院入道前太政大臣（西園寺公重）・従三位行子・公重死（正平二二年九月三日）以前
1351　遍照光院入道前太政大臣（西園寺公重）・従三位行子・公重死（正平二二年九月三日）以前
1352　後村上天皇・後醍醐天皇・正平一八年（一三六三）八月十六日（後醍醐天皇二五回忌）
1353　権中納言中御門経高・経高娘
1354　新待賢門院・「題しらず」
1355　新宣陽門院・「題しらず」
1356　長慶天皇・「懐旧涙」
1357　宗良親王・後醍醐天皇・延元四年（一三三九）長月末・1358と贈答
1358　四条贈左大臣（四条隆資）・後醍醐天皇・延元四年（一三三九）長月末・1357と贈答
1359　関白左大臣（二条教頼）・宗良親王子・「宗良親王歎く事侍りし神無月の比」（天授元年一一月）・1360

と贈答

1360　宗良親王・宗良親王子・1359と贈答

1361　文貞公・「神無月の末つかた」（文貞公は元弘二年（一三三二）十月二九日死）、辞世歌

1362　文貞公・辞世歌

1363　達智門院・後醍醐天皇・延元四年（一三三九）冬

1364　前大納言（中御門）光任・後醍醐天皇・延元四年（一三三九）冬以降

1365　妙光寺内大臣・「題しらず」

1366　中院入道一品（北畠親房）

1367　四条贈左大臣（四条隆資）・法印俊慶（為定弟）・「法印俊慶身まかりし比」（貞和二年（一三四六）以前）・1368と贈答

1368　宗良親王・法印俊慶（為定弟）・1367と贈答

1369　源重泰・吉田前内大臣（吉田定房）・「吉田前内大臣身まかりける時」（定房は延元三年（一三三八）正月二十三日死）

1370　権中納言経高母・「題しらず」

1371　四条贈左大臣（四条隆資）・四条隆量（1391より推定）・隆量の死（元弘三年（一三三三））の長年の後(注9)・高野山にて光俊手跡（詞書に掲出）に併記

1372　後醍醐天皇・「吉野の行宮におましましける時」

1373〜1375　新待賢門院・後醍醐天皇・1333と同一時期か

1376　後醍醐天皇・吉田前内大臣、右大弁清忠などの人々・延元三年頃（坊門清忠は延元三年（一三三八）三月二十一日死、定房は1369参照）

1377　後村上天皇・妙光寺内大臣・正平二二年（一三六七）六月二十三日頃・1378と贈答
1378　右近大将長親母・妙光寺内大臣・正平二二年（一三六七）六月二十三日頃・1377と贈答
1379　右近大将長親母・権中納言長賢・正平二一年（一三六六）家賢、長賢死後（長賢は正平二十一年（一三六六）父家賢死に続いて死）
1380　妙光寺内大臣母・妙光寺内大臣、権中納言長賢・正平二一年（一三六六）家賢、長賢死後・1379に詠み添える
1381　後村上天皇・権中納言長賢・1382と贈答
1382　右近大将長親母・権中納言長賢・1381と贈答
1383　新待賢門院・後醍醐天皇・「後醍醐天皇かくれさせ給て後」
1384　達智門院・後醍醐天皇・「（1383と）おなじ比」
1385　遍照光院入道前太政大臣（西園寺公重）・新待賢門院・新待賢門院薨去（正平一四年（一三五九）四月十八日）以降・1386と贈答
1386　左近中将顕氏母・新待賢門院・新待賢門院薨去（正平一四年（一三五九）四月一八日）以降・1385と贈答
1387　詠み人しらず（宗良親王子）・親王子の天授元年（一三七五）九月薨去時・1388と贈答・辞世歌
1388　宗良親王・宗良親王子・天授元年（一三七五）九月末・1387と贈答
1389　長慶天皇・世泰親王・世泰親王薨去（天授年間）翌年・1390と贈答
1390　従二位教子・世泰親王・世泰親王薨去（天授年間）翌年・1389と贈答
1391　四条贈左大臣（四条隆資）・四条隆量・隆量死（元弘三年（一三三三））の長年の後（1371と同時期か）
1392　宗良親王・右近大将長親子・「右近大将長親いとけなき子におくれて侍りし比」・1393と贈答
1393　右近大将長親・右近大将長親子・1392と贈答

まず、巻頭歌、巻軸歌を見ると、巻頭は花山院師賢詠、巻軸は花山院長親詠である。『新葉和歌集』における各巻の巻頭・巻軸歌人は、春上後村上院・妙光寺内大臣（花山院家賢）、春下後醍醐天皇・新宣陽門院、夏冷泉入道前右大臣（洞院公泰）・よみ人しらず、秋上宗良親王・宗良親王、秋下関白左大臣（二条教頼）・尊良親王、冬宗良親王・祥子内親王、離別妙光寺内大臣（花山院家賢）・右近大将長親母（花山院家賢妻）、羇旅よみ人しらず（宗良親王）・後醍醐天皇、神祇前中納言為忠（二条為忠）・後村上院、釈教前大僧正忠雲・最恵法親王、恋一よみ人しらず・冷泉入道前右大臣（洞院公泰）、恋二妙光寺内大臣（花山院家賢）・よみ人しらず（宗良親王）、恋三前内大臣隆（四条隆俊）・よみ人しらず（宗良親王）、恋四福恩寺前関白内大臣（二条師基）・文貞公（花山院師賢）、恋五後醍醐天皇・関白左大臣（二条教頼）、雑上後村上院・前内大臣顕（北畠顕統）、雑中尊良親王・長慶天皇、雑下中院入道一品（北畠親房）・後醍醐天皇、哀傷文貞公（花山院師賢）・右近大将長親（花山院長親）、賀長慶天皇・後村上院であり、南朝三代の天皇と皇族、上中流貴族を配する。二条為定が撰にかかわった『続後拾遺和歌集』、『新千載和歌集』のような勅撰集は、いずれも御子左家の歌人の詠や二条家嫡流の詠を多く巻頭・巻軸に使用している(注10)が、和歌の宗匠として必要な二条家の歌人は、一時的に南朝に滞在した二条為忠しかいなかったゆえ、こうした人選にならざるをえなかった。

続いて巻内の和歌の配列を見ていくと、無常を主題とした歌群ではじまり、前半部に基本的に四季に配慮しつつ和歌を並べ、季を離れた後半（1365～）になると、あらためて明日知れぬ人の身を歎く和歌を置き、最終的には子に先立たれた人々の歌群で結ばれる。花山院長親の、宗良親王との贈答歌が巻末に置かれ、巻を結ぶに際して、贈答歌という形式、及び和歌（「よそへつつみればしをるるわが袖にかけじやさらになでしこの露」）が、やや型破りな印象がある。

追悼対象者は表に見るように後醍醐天皇が最も多く、詞書からはっきりわかるものが一七首に及ぶ。ついで、後村上帝追慕の和歌が多くを占め、明らかにこの二帝、中でも南朝の祖である後醍醐帝を強く追慕している。詞書を見ると、後醍醐帝に対する和歌は、崩御時、翌年、十一年後、二十五回忌と、後村上帝に対する和歌も崩御後、九回忌と、

時の流れの中で幾度も詠まれ載せられており、哀悼の念の重なりが、両者への思いをきわだたせている。他の追悼対象者は、基本的にはその死に際してある時期に詠まれた和歌が載せられるのみである。哀傷巻内に二度にわたり追悼詠が載る例も、新待賢門院、宗良親王子、二条為定弟の法印俊慶と多くはない。哀傷の巻における両帝の重要性が明らかになろう。

四

後醍醐帝・後村上帝に関する歌群の特徴を考えたい。

後醍醐に関連する詠を見ていくと、配列の上から一まとまりの歌群としての印象を指摘できるものがいくつかあるように思われる。まず、1332から1338に至る詠である。

後醍醐天皇かくれさせ給て又の年の春、花を見てよませ給ける　新待賢門院

1332時しらぬ歎きのもとにいかにしてかはらぬ色に花のさくらむ

つは物のみだれによりて芳野の行宮をもあらためられて、次の年の春、塔尾の御陵にまうで給はんとてかの山にのぼらせ給けるに、蔵王堂をはじめてさならぬ坊舎どもみな煙と成りにけれど、御陵の花ばかりは昔にかはらずさきてよろづ哀におぼえ給ければ、一ふさ御ふみの中に入れて給はせ侍るとて

1333みよし野は見し世にもあらず荒れにけりあだなる花は猶のこれども

御返し　中務卿宗良親王

1334いまみてもおもほゆるかなおくれにし君が御かげや花にそふらん

おなじ御陵のほとりに桜を千本うふべきよし思ひたちて、としどしにうへけるが、やうやう花もさきければよめる　粟田久盛朝臣

1335うへおかば苔の下にもみよしのの御幸の跡を花や残さん

寄花無常といへることを　右近大将長親母

１３３６みし人のなきが数そふ春をへて花もあだなる世とやしるらん

二品法親王仁誉

１３３７残りなくちるにつけても有りはてぬ世のことわりぞ花にしらるる

芳野の行宮にてよませ給ける御歌中に

後醍醐天皇御製

１３３８あだにちる花を思ひのたねとしてこの世にとめぬ心なりけり

１３３２から１３３５が、詞書から明らかなように桜花に後醍醐天皇をしのぶ和歌であり、１３３６、１３３７と「寄花無常」を詠じた和歌が配置され、その後に後醍醐自身の詠がある。年々変わらず咲く桜は、移り変わる世の有様や消え失せる人の命のはかなさをきわだたせる。さらにまた、宗良親王が「君が御かげや花にそふらん」と花につけて後醍醐帝を思い、粟田久盛が「みよしのの御幸の跡を花や残さん」と吉野への帝の滞在を花やかな盛事とあらためてとらえなおすように、爛漫たる桜の花こそは帝王後醍醐の威光を象徴するものであった(注11)からこそ、思いおこされるその盛りの美しさは類いないものであった。そして、幾多の春を見るうちに花が世の無常を知るかと詠む１３３６、散る花に世の無常を見る１３３７を経て、はかなくうつろう花を見据え、世のはかなさを理解し達観していたと見える後醍醐の詠が置かれている。後醍醐帝をしのぶ贈答歌で始まる１３３２から１３３８の歌群においては、花が過去の栄華のうつろいを廷臣らの心に思いおこさせる素材であったが、末尾にそうした思いを既に生前に心中に抱えていたと見える後醍醐帝の詠が置かれることによって、後醍醐帝の心情内に廷臣らの想念が包摂されていき、それゆえにありし日の後醍醐帝が意識され、後醍醐の詠まで一まとまりの歌群として印象づけられる可能性を持つのである。

また、次にあげる１３７２から１３７６詠、

吉野の行宮におましましける比、御心ちれいならざりけるを、御風のけなれば、さだめてはやくおこたらせ給はんずらむなど人の申しければ

後醍醐天皇御製

１３７２露の身を草の枕におきながら風にはよもとたのむはかなさ

おなじ天皇の御陵にまうで給てよませ給ける　　新待賢門院

１３７３九重の玉のうてなも夢なれや苔の下にし君を思へば

１３７４ひきつれし百のつかさの独だに今はつかへぬ道ぞかなしき

１３７５さびしさもつひのすみかと思ふには心ぞとまる峰の松かぜ

吉田前内大臣右大弁清忠などうちつづき身まかりにける比、思しめしつづけさせ給ける　　後醍醐天皇御製

１３７６ことはん人さへ稀に成りにけりわが世の末の程ぞしらるる

これらは後醍醐帝追悼の哀傷歌の前後に吉野で風邪の病床にある後醍醐詠と、死の前年（延元三年）の作と推定される後醍醐詠を置く。自らの命に関して心細げな後醍醐の詠を前後に置くことで、今となっては玉のうてなもなく、百官もいない亡帝の面影がよりきわだち、やはり一まとまりの後醍醐追悼歌群として詠まれうる。哀傷巻に無常、懐旧の詠が入るのは珍しいことではないが、悼まれる人物の生前のそうした詠を哀悼歌群に添えた形になっているのは勅撰集の哀傷の部には見られず、『新葉和歌集』哀傷巻の特色となっている。

また、後醍醐帝と後村上帝はそのつながりを意識的に『新葉和歌集』各所で示されているように思われる。例えば、『新葉和歌集』５９４の後醍醐天皇詠である。

元弘三年立后屏風に、春日祭　　後醍醐天皇御製

５９４　たちよらばつかさづかさも心せよ藤のとりゐの花の下陰

この歌は既に『新千載和歌集』神祇部９８２に入集し、そこでは続く９８３番の足利尊氏詠（「諸人もけふふみ分けて春日野や道ある御代に神まつるなり」）とあわせて君臣唱和のイメージを形成している(注12)が、『新葉和歌集』は神祇歌の中、春日の詠の冒頭にあらためてこの歌をとり、続く５９５には後村上帝の詠

年中行事百首の御歌中に、おなじ心を　　後村上院御製

595　きさらぎや雪まをわけしかすが野におく霜月も神まつるなり

を置き、両帝のつながりを演出する。さらに、後醍醐天皇の和歌が有する「つかさづかさ」という百官を意味する言葉は、勅撰集と『新葉和歌集』を通して二首（『新千載和歌集』982及び『新葉和歌集』594（後醍醐天皇同一歌、重出）、『新葉集』468（後村上天皇）しか見られないまれな語句であり、二首のうちの一首、同じ『新葉和歌集』冬歌468、後村上帝詠

初雪見参のこころを　　後村上院御製

468　名をとへばつかさづかさも心して雲井にしるきけさの初雪

は後醍醐帝詠を意識して詠まれていようし、『新葉和歌集』内でも冷泉入道前右大臣（洞院公泰）による469歌（「ふりそむるみかきの雪はあさけれどつかへてしるき跡やのこらん」）と君臣唱和のイメージを持つように配列されており、後醍醐帝の後を継ぐ帝王の和歌として『新葉和歌集』に入れられたものと考えられる。

こうした南朝天皇間の帝王性の継承は、哀傷の巻では、各天皇の忌日の仏事に関連した詠、例えば後醍醐天皇二五回忌の際には後村上帝詠（1352）がおかれ、後村上帝九回忌の際には「四の時ここのかへりに成りにけり」と『古今和歌集』の仮名序の語句を用いた長慶天皇の詠（1341）が置かれる形で表現されている。

さらに、哀傷巻に入れられた右近大将長親母と妙光院内大臣母、後村上帝と長親母との一連の贈答歌のやりとりも、続く後醍醐天皇追慕の新待賢門院の歌と関連して、贈答の状況全体が後村上帝の帝王としての立場を示すものとして入れられているように思われる。

権中納言長賢内よりあづかりおきける夜の鶴といふ御比巴を、身まかりて後返したてまつるとておもひつづけ侍りける　　（右近大将長親母）

1379雲井までかよはばつげよよるの鶴の鳴くねにたぐふ思ひ有りとは

是をききて又よみ侍りける　　妙光寺内大臣母

１３８０ねにたてば我おとらめや夜の鶴の子を思ふことも君独かは

彼御比巴にそへて侍りけるばちに、宸筆にて梵字などあそばされてかへさせ給ひけるつつみ紙に

後村上院御製

１３８１いける世にいかが契りしよつのをのかけはなれてもあられけるかな

御返し

右近大将長親母

１３８２思ひきや行末かけし四絃のひき別れてもあらるべしとは

１３７９詞書の長賢は、花山院長賢。長親の兄であり、父妙光寺内大臣（家賢）と同じ正平二一年（一三六六）に亡くなった。１３７９、１３８０は、琵琶の名である「夜の鶴」を使いつつ、子をうしなった長賢の母の詠に、子と孫をあいついでなくした長賢の祖母が悲嘆の情を詠み添えた歌である。１３８１・１３８２は、琵琶のばちを長賢供養のために返した後村上帝と長親母の贈答。直前に妙光寺内大臣の一周忌に後村上帝が右近大将長親母につかわした贈答歌の組（１３７７・１３７８）があるから、１３７７から１３８２の歌群は、花山院家側から見れば後村上帝との近しい関係を示すものであるのだが、１３７９から１３８２の歌群は、後村上帝が廷臣長賢に琵琶を貸し与えていたことがわかる点に着目される。当該贈答歌群の後には、後醍醐天皇遺愛の琵琶を見ての新待賢門院の哀傷歌

後醍醐天皇かくれさせ給て後、つねにひかせ給ける御琵琶を御らんじて

１３８３みるままに涙ぞかかる四絃の行末ながきねにつたへても

が存している。後醍醐天皇には、雑下にも、『増鏡』、『太平記』では後醍醐が六波羅にとらわれていた際の詠とする、琵琶を献じた後京極院との間の贈答歌（１２９４・１２９５）があり、雑下１２９０から１２９３は天授三年（一三七七）七月七日の御遊の日と翌日の、琵琶を奏した嘉喜門院と長慶天皇の贈答である。このように、南朝天皇三代と琵琶とのかかわりの様は、『新葉和歌集』に多くとりあげられているのである。

後醍醐天皇が、持明院統に対抗し帝王学として琵琶を熱心に習得したことは、近年研究が進み(注13)明らかになって

きている。後醍醐は、践祚の翌年の文保三年（一三一九）、ついで元亨元年（一三二一）に西園寺実兼より琵琶秘曲を伝授し、嘉暦三年（一三二八）には琵琶西流の奥秘事の口伝も習得した。後村上天皇も、法印良空より正平十年（一三五五）に琵琶秘曲を伝授され、十三年には琵琶播磨局流の最極秘説を受けていることを示す資料がある(注14)。一方、西園寺家が伝えた琵琶西流は持明院統の後伏見院・光厳院へと伝わり、光厳院は崇光院へと伝えている。光厳院から崇光院への秘曲伝授は、後村上天皇の秘曲伝授と同年の正平十年、また十一年になされ、しかも南朝の河内金剛寺行宮に北朝上皇が幽閉中に行われており、同一寺内での両統それぞれの伝授であり、琵琶を介した両朝のつばぜり合いの様相であった。

それゆえ、近傍の勅撰集には見うけられない(注15)、天皇自身が関わる琵琶を題材とした贈答歌群は、南朝の時代を通じ、後醍醐帝が権力の指標の一つとしたこの楽器と、後村上帝の強い結びつきを示しているだろう。哀傷の巻には、このような形で後醍醐帝、後村上帝の帝王性を一段と印象づける和歌の選択がなされているのである。さらに言えば、花山院長親が、後に『耕雲口伝』において、琵琶の学び方を例として和歌初学者の勉学方法を述べているのも、花山院一族が琵琶を介して、天皇と関わることを重視していたなごりとも言えるだろう。

五

哀傷の巻の巻頭・巻軸歌を持つ花山院一族の、この巻における和歌を考えたい。

哀傷の巻に花山院家の人々の詠は多く、文貞公（花山院師賢・１３２３、１３６１、１３６２）とその妻である妙光寺内大臣母（花山院家定女・１３４４、１３８０）、妙光寺内大臣（花山院家賢・１３６５）とその妻の右近大将長親母（１３３６、１３７８、１３８２）、右近大将長親（１３４９、１３９３）と、一族で11首この巻に入集している。巻内においては、長親母が、前章で見たように夫の妙光院内大臣と子である長賢の死を悼んだ後村上帝の贈歌への返歌を入れられ、長親もまた同じく、彼の子の早世を見舞う宗良親王の贈歌に返しており（巻軸歌）、花山院家の南朝皇統との距離の近さが幾度も示されるのである。

さらに、花山院家の和歌の印象を強めるものとして、左注の存在がある。文貞公の配所における次の辞世の詠

下総国に侍りける比、神無月の末つかた病おもく成りて今はかぎりとおぼえけるに思ひつづけ侍りける　文貞公

１３６１雲の色にしぐれ雪げはみえわかでただかきくらすけふの空かな

１３６２しでの山こえんもしらでみやこ人猶さりともと我やまつらん

かくてつぎの日身まかりにけるとなん

は、翌日にみまかったことが左注に記されて、詞書と左注により物語的彩りを添えられ、辞世歌がまさにいまわの時の詠であったのだと意識させる効果を増大させている。同様の注は、哀傷巻では、１３８７、１３８８の、宗良親王とその子の贈答

なが月の末つかたやまひおもく成りて、いまは限に成りぬるよし申しおこせ侍りしついでに　読人不知

１３８７いかに猶涙をそへて分侘びんおやにさきだつ道芝の露

返し　中務卿宗良親王

１３８８我こそはあらき風をもふせぎしに独や苔の露はらはまし

是をみて次の日のあしたつひになく成りにけるとなん

に見られる。『新葉和歌集』中で、他に左注の存する歌は、羇旅巻軸の、名和長年の忠節を詠じた後醍醐天皇歌、離別巻の配所に赴く文貞公と妙光院内大臣母の贈答歌群（５１６～５１８）(注16)、雑中の１２０６、１２０７の修行僧の、さき山行宮を帝の御所と看破した歌であり、帝と編者宗良親王関連の和歌にしか付されていない。『新葉和歌集』の編者宗良親王と補助に入った花山院長親の管理した和歌群の『新葉和歌集』における重要性が感得されよう。

そして、哀傷の巻に存する贈答歌以外の花山院家の人々の詠には、共通の語句を使用した歌がいくつか入集してい

るのに気がつく。すなわち、

旧遊零落半帰泉といふことを読み侍りける　文貞公

1323みし人のなかばはかへる泉川おくるる波もあはれいつまで

寄花無常といへることを　右近大将長親母

1336みし人のなきが数そふ春をへて花もあだなる世とやしるらん

題しらず　妙光寺内大臣

1365哀てふことをあまたに袖ぬれてなきが数そふ世を歎くかな

の三首は、「みし人」「なきが数そふ」という二つの語句で重なりを持ちあっている。長親母の歌は『続後撰和歌集』、雑下1222番の俊成卿女歌「見し人もなきがかずそふつゆの世にあらましかばの秋のゆふぐれ」を取り、季節を春に変えているものだが、この三首からさらに思い出されるのは、小大君詠「あるはなくなきは数そふ世の中にあはれいつまであらむとすらむ」であろう。この歌は、『新古今和歌集』の哀傷巻では小野小町詠として第四、五句を「あはれいづれの日までなげかん」として入れられているが、『栄花物語』、『後葉集』や「新時代不動歌合」（九条基家撰）にはこの形で入る。花山院一族の和歌は、かつての友人たちがいなくなっていく世のはかなさを嘆じる思いを同一語句により共有し、響かせているのである。そして、巻頭に師賢詠、後醍醐帝を悼む花の歌群に長親母詠、季を離れた哀傷の巻の後半部最初に家賢詠を配し、巻末には、わが子までも先立つ世のはかなさを、同じく子を失った親である（1388詠）宗良親王と長親との贈答で結ぶ。花山院一族の和歌が表現する、親しい人々に死にわかれ、なすすべもない悲しみは、哀傷巻の巻頭歌でもある1323歌の詞書がはっきりと示しているように、この巻に底流する大きなテーマであり、彼らの和歌は、哀傷の巻の構成の柱として配置されたのである。おそらくは子をいたむ独詠歌を選び配することもできたであろうに、巻軸にあえて長親の贈答歌を置くのは、宗良親王が子を失った親として共感を示していることを前面に出すためではなかろうか。

また、１３２３歌は、『続後拾遺和歌集』の哀傷巻の巻頭歌「人の世はながれて早き山川の岩まにめぐるあはれいつまで（１２２６・題しらず・中務卿宗尊親王）」をも意識していると思われる。特徴的な第五句の「あはれいつまで」という表現は、勅撰集では『続古今和歌集』雑下に初出（「ききなるるやそぢあまりのかねのこゑよひあかつきもあはれいつまで」（１８０８・題不知・信実朝臣）で、『続千載和歌集』雑下に「しづがやにかこふやしばのかりのよはすみうしとてもあはれいつまで」（１９９４・（述懐の心を）・院御製（後伏見院））、『新拾遺和歌集』哀傷に「昨日といひけふとさき立つ夕煙きえ残る身のあはれいつまで」（８８１・「題しらず」・前権僧正玄円）がある。だが、『続後拾遺和歌集』同様、川のイメージで歌を作り「あはれ」と「泡」を掛ける詠法は、『新葉和歌集』のみである。『続後拾遺和歌集』が、後醍醐天皇の親政時の下命による撰集で、選者為藤の死去により為定があらためて拝命し選んだ集であることを思えば、哀傷巻の巻頭に『続後拾遺和歌集』の類想歌を選ぶことはためらわれるものでもないであろう。さらに、慣れ親しんだ相手を表す「みし人」の語句は、宗尊親王に「見し人の昨日のけぶりけふのくもたちもとまらぬ世にこそ有りけれ（『風雅和歌集』・雑下・１９９６・題しらず）」詠、「年ごとにかはらぬ花やみし人のなきがおほくの春を知るらむ」（竹風和歌抄・文永六年五月百首歌・春・７０４）詠があり、花山院家の人々は宗尊親王詠を学んでいた形跡がある(注17)。

なお、長親母歌は、宗尊親王の命で弘長二年九月に行われた「三十六人大歌合」（九条基家撰）における法印実伊歌「みる人のなきがかずそふはるごとに花もあだなる世をやしるらん」に酷似している。この歌は『人家和歌集』にも収録され（作者名欠落）、歌題は「寄花無常」である(注18)。花山院家は宗尊親王周辺の和歌資料を保持しており、あるいは酷似の理由は、長親が実伊歌に母名をつけてしまったものか。

哀傷巻の花山院家の人々の詠は、その数の多さ、占める位置の重要さ等から見て、周到に作成されて整えられ入れられていると言うべきであり、花山院家の詠草をとりまとめたと思われる長親の哀傷巻の撰歌への影響力は見逃せないものといえよう。

六

『新葉和歌集』の哀傷巻は、二で見たように、勅撰集に比べ贈答歌がとりわけ多かった。贈答歌は、読まれた時期や状況を示す詞書を持つから、巻に配列した場合にも、題詠と比較して、より具体的にまた詳細に詠歌状況が再現される。詞書によって、故人とつながる人々による、四季折々の追悼の場面が語られ、故人の追悼の心情を、言葉を共有する二首の歌のやりとりでなすゆえに、哀悼の意が重ねて強調されることになるのである。その意味で、哀悼される人物が後醍醐帝、ついで後村上帝に集中するこの巻では、追憶、追悼の思いの重なりが、両帝への哀悼心の強い表現となる。加えて、贈答歌に付された詳細な詞書が故人との生前の交友の一場面を呼び込んでくる場合、当該歌や場面が『新葉和歌集』中に存することによって、哀傷歌の印象はより強まろう(注19)。例えば1328番がそうである。

すみ侍りける寺の梅を、後村上院つねにめされけることを思ひ出でて、かくれさせ給て又の年の春、新宣陽門院いまだ一品宮と申しけるにたてまつるとて　後醍醐天皇大納言典侍

1328春ごとにとはれし君がなさけをば花もさこそは思ひ出づらめ

この和歌の詞書は、次にあげる巻十、釈教歌614、615の贈答と響き合っている。

後醍醐天皇大納言典侍さまかへて後、住吉の西林院といふ所にすみ侍りける時、彼寺の梅花をめされけるを、たてまつりたりければ　後村上院御製

614　わがたのむにしの林の梅花みのりの花のたねかとぞ見る

御返し　後醍醐天皇大納言典侍

615　たのみける君がめぐみの色そへてみのりの花は猶ぞさかへん

後村上帝の生前の仏道希求の和歌を重ねることにより、時の流れをへても変わらない故人との紐帯が強調されると共に、仏道心あつい帝の菩提を思い、面影をしのぶ強いよすがとなる。

また、詞書内に集中の和歌の一部が語られる形のものとして1342がある。

後醍醐天皇かくれさせ給て後、御硯の中より葵に、二葉かはらぬおなじかざしはなどかかせ給て入れられたりけるを御覧じ出して　　新待賢門院

１３４２かれつつも二葉かはらぬ草の名をかけはなれぬる我ぞかなしき

つぎの年の夏よませ給ける御歌の中に

１３４３今年こそいとどまたるれ時鳥しでの山路の事やかたると

「二葉かはらぬおなじかざしは」と書かれた後醍醐帝の和歌は、雑上に「題しらず」として入る１０６１「年をへて哀とぞみるもろかづら二葉かはらぬおなじかざしは」。詞書で、１０６１の一部を示すことにより、巻を隔てて入集した両歌は時を越えた会話となり、１０６１を「年をへて哀とぞみる」形となった追慕の情が「かけはなれぬる我ぞ悲しき」とつながっていく。翌夏の詠１３４３を後置することで、生前の思い出を背後に持った、亡き後も消える事のない慕情の流れが感得されることになる。

こうした贈答歌群の幾重にも重なりつながる配列は、哀傷の巻が、単純に南朝の人々の死に際してのさまざまな悲しみの詠をつらねた総花的な巻として構成されているわけではないことをあらためて示している。哀傷の巻の和歌群は、とりわけ吉野蒙塵後、あまりにも早く逝った後醍醐帝の存在を、帝亡き後何世代にもわたる臣下の歌をつらね、後醍醐を継ぐ後村上、長慶の南朝の帝の詠も配することで、クローズアップし、集中に入れた生前の歌と響き合う和歌を用いることによっても強めながら、繰り返し偲び、讃仰し続けていく。その姿勢はまた、後醍醐帝の後を継いだ後村上帝に関しても同様であり、後醍醐の決起の約五十年の後の現実の厳しさを、後醍醐帝と運命を共にし南朝に関わり続けてきた人々が、かみしめていることをも示そう。

『新葉和歌集』の哀傷巻が見せる、贈答歌を多用した狭く緊密な哀悼の世界は、南朝の人々に限定する撰歌範囲の制限と、戦乱による資料の乏しさによるものでもあり、撰者である宗良親王とそれを補助した花山院長親の撰集作業は、非常に私的な和歌の選択をあらわに前面に出す形となった(注20)。いわば撰者の念頭に哀傷巻としての体裁を整える

骨組はあっても、それをおおうために選択できる和歌の蓄積がない状態といえようか。花山院家の人々の題詠歌が、贈答歌と他の贈答歌のつながりを助けるように巻の核となる部分に据えられ、類似表現を持ちあい、響き合う形式をとることも許容されている。哀傷巻が見せている和歌の選択・配列は、最終的に勅撰集としての体裁を整えるにはやはり不十分であり、そこにこの集の私的な素顔がうかがわれるのである。

本文中の和歌は特にことわらない限り『新編国歌大観』より引用する。

（注1）『新葉和歌集』の本文は『新編国歌大観』第一巻所収の国立公文書館内閣文庫本（二〇〇・一四九）を使用する。

（注2）川田順『定本　吉野朝の悲歌』（昭和14・9、第一書房）などが代表的な書である。

（注3）小木喬『新葉和歌集　本文と研究』（昭和59・3、笠間書院）井上宗雄『中世歌壇史の研究　南北朝期』（昭和62改訂新版・明治書院）等が主たる研究書である。

（注4）井上宗雄注3書に指摘される。また福田秀一「中世勅撰和歌集の撰定意識―序・題号・部立構成から見た―」（「成城文芸」季刊第47号・1967・7）の考察がある。

（注5）深津睦夫「新葉集の撰集意識をめぐって」（桑原博史編『日本古典文学の諸相』（平成9・勉誠社）所収）が千載・続千載・新千載の勅撰集や『続現葉集』などの私撰集の部立との類似を述べられる。

（注6）井上宗雄注3書に指摘がある。久保田淳「南北朝時代の和歌―政治的季節における和歌―」（『中世和歌史の研究』（平成5・明治書院）、深津睦夫『中世勅撰和歌集史の構想』第一編第四章「十三代集の政治性」（平成17・笠間書院）等に言及がある。

（注7）なお、哀傷の巻を持たず、京極派和歌の流れをくむ勅撰集である『風雅和歌集』は、雑巻におさめた哀傷歌に二首一組の贈答歌が非常に多い。これについては稿をあらためたい。

（注8）哀傷巻の1359・1360、1387・1388の和歌については、小木喬「吉野に逝去の宗良親王御子」（『新葉和歌集本文と研究』研究編論考5（昭和59・笠間書院）が1330と重ねて詳しく論じている。

（注9）隆量の死に関しては、正平三年ころから正平七年二月までの間と小木氏注3書に推定がある。

（注10）はやく岩佐美代子「二十一代集各巻の巻頭・巻軸作者とその玉葉集における特色付、「定成朝臣筆玉葉集正本」考」（「和歌文学研究」第四十四号・昭和56・8）があり、『続後拾遺和歌集』に関しては、深津睦夫『中世勅撰和歌集史の構想』（平成17・笠間書院）第二編第一章「続後拾遺和歌集の撰集意識」に言及される。例えば『新千載和歌集』は、巻頭・巻軸の順に、春上藤原俊成・二条為

定、春下伏見院・藤原俊成、夏花園院・俊成卿女、秋上醍醐天皇・二条為世、秋下詠み人しらず・六条有家、冬二条為世・藤原家隆、離別上東門院・詠み人しらず、羇旅紀貫之・藤原為家、神祇後宇多院・等持院贈左大臣、恋一在原元方・法皇、恋二柿本人麻呂・小野小町、恋三詠み人しらず・堀河右大臣、恋四天智天皇・贈従三位為子、恋五紫式部・寂蓮、雑上大納言師頼・後宇多院、雑中二条為世・伏見院、雑下後鳥羽院・壬生忠岑、哀傷藤原定家・大納言顕実母、慶賀詠み人しらず・日野俊光である。

(注11) 後醍醐帝が南殿の桜を愛したことに触れた論に久保田淳「南殿の桜」(「季刊文学」第一巻第一号・1990・1)、君嶋亜紀「後醍醐天皇と雲井の桜―『新葉集』の撰集意図を探る―」(「国語と国文学」第八十四巻第七号・平成19・7)、「南朝和歌の都―『新葉集』宮中の花歌群から―」(「日本文学」第五六巻第一二号・2007・12)がある。

(注12) 深津睦夫「新千載和歌集の撰集意図」(『中世勅撰和歌集史の構想』第二編第三章、平成17・笠間書院)。

(注13) 後醍醐天皇の琵琶習得については、相馬万里子「琵琶の時代から笙の時代へ―中世の天皇と音楽―」(「書陵部紀要」第49号(平成9))。また豊永聡美『中世の天皇と音楽』(2006・吉川弘文館)第一部第四章「後醍醐天皇と音楽」。

(注14) 宮内庁書陵部蔵『三曲秘譜並三極秘決』に記されている。後村上天皇の琵琶秘曲伝授に関しては、村田正志「後村上天皇の琵琶秘曲相伝の史実」(村田正志著作集第二巻『續南北朝史論』第二章第四節(昭和58・思文閣出版)。また相馬万里子「琵琶の時代から笙の時代へ―中世の天皇と音楽―」(「書陵部紀要」第49号(平成9))に整理されている。

(注15) 玉葉集2282番に、西園寺実兼の春宮(伏見天皇)琵琶師範として我が身の栄誉を思う和歌があり、持明院統側の琵琶に対する思い入れがうかがわれる程度である。

(注16) 配所に赴く文貞公(師賢)をめぐる離別の巻の歌群および、それらを通して考えられる花山院家の人々の入集歌の特質については、深津睦夫「新葉集の撰集意識をめぐって」(桑原博史編『日本古典文学の諸相』(平成9・勉誠社)に考察がある。

(注17) 例えば、花山院師賢の「うれへあればきくことといとふ我が身ともしらでやここに鶯のなく」(雑上・1010)は、宗尊親王詠「うれへあればきくことといとふやどぞともしらずがほなる鶯のこゑ」(『柳風和歌集』・弘長三年六月廿四日当座百首・春・360)に非常によく似ており、また宗良親王にも「うれへあれば聞くことといとふわがやどになれのみ春と鶯ぞなく」(『李花集』・春・25)がある。新編国歌大観中に「うれへあれば」の句は、四首しかなく(宗尊親王2首、宗良親王1首、師賢1首)、宗良親王も師賢も宗尊親王の表現を接取したと考えられる。花山院一族が、宗尊親王の詠を尊重し、学んでいるのは、宗尊親王同様中書王でもあった宗良親王の影響があったと考えられるのではないか。

(注18) 『人家和歌集』に関しては、福田秀一「人家和歌集(解説・錯簡考と翻刻)」(『国文学研究資料館紀要第七号』(1981・3))参照。

(注19) 『新葉和歌集』哀傷巻には、詞書中に贈歌を示してある歌や、詞書中に示したかつて詠まれた故人の歌に詠みそえた歌が各一首存

する。これは贈答歌のパーセンテージの計数には含めていない（勅撰集の調査についても同じ）が、贈答歌の性質の考察に加える。

（注20）これは准勅撰集となされたこととは別個に、集の特徴としてとらえたい。

なお、この論は、「戦（いくさ）に関わる文字文化と文物の総合的研究」（平成一九年度科学研究費基盤研究S）による成果である。